

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

韓国の民俗音楽調査から：
研究教育機関等の訪問を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 哲男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004643

韓国の民俗音楽調査から

研究教育機関等の訪問を中心に

櫻井哲男*

1. はじめに

本年(1976年)1月9日から2月29日までの50日間、わたしは韓国、とくに済州島において民俗音楽の調査をおこなった。この調査は、文部省の昭和50年度科学研究費補助金(海外学術調査)によるものである。研究分担者としては、民族音楽、舞踊を専攻している櫻井笙子が同行した。

わたしは大学院在学中の1972年夏に、東京芸術大学の小泉文夫助教授(当時)の助手として韓国各地における音楽調査に同行させていただき、その後引き続き、単独で約1カ月間、済州島において同様の調査をおこなっている。韓国本土、済州島ともに今回が2度目の訪問である。前回の済州島調査では、地理的、文化的に独立した地域としての「島」の住民の日常生活にあらわれる、さまざまな音楽的現象を、全体として大まかに把握することに重点をおいた。その結果、不十分ながらも、それらの音楽的現象の種類と機能、音楽的特徴などのアウトラインを明らかにすることができた。

この点に関しては、前回の調査にもとづいた研究報告として、拙稿[櫻井, 1975: pp. 101-115]がある。

これに対して今回は、第1に、中国を中心としたアジア東部の広大な音楽文化圏の中で韓国音楽がどのような特質を持っているかということ、民俗音楽の面から明らかにしようという展望のもとに、その足がかりとして、ある程度様子の分かっている済州島を選んだのである。この点と関連して、第2に、近い将来におこなおうと考えている韓国本土での調査を念頭において、民俗音楽の中で種類の豊富な点で資料的価値の高いと思われる民謡、なかでもリズムの比較研究の上で欠くことのできない仕事唄(広い意味の work song)に重点を置くとともに、前回の調査では不十分であった、消滅しつつある古い唄、少数の山間村落に特有の唄なども、できるだけ調査、録音するように努めた。また、前回すでに録音済みのものについても、異なる村落や同一村落でも違ったインフォーマントにあたるなどして、より確かなデータを得るためにできるだけ多くの録音資料を集めることを目標にした。

これらの意図にもとづき、調査期間の前半にソウルで、ソウル大学校音楽大学、国立国楽院などを訪問して、韓国の音楽全般に関する情報や文献資料の収集にあたる一方、コリアハウスや古典舞踊研究所で、韓国の伝統的な舞踊にナマの形で接することができた。

2. ソウル大学校音楽大学

ソウル大は名実ともに韓国第1の学府であり、学部に対応するいくつかのカレ

* 国立民族学博物館第5研究部

ッジから成っていて、音楽大学もそのひとつである。同じソウル大の中に美術大学もあり、日本でいうと、ちょうど東大のような総合大学のなかに芸大の音楽学部や美術学部が置かれているようなものである。芸術が、特に理論面で哲学や歴史学、工学、人類学などの諸分野とかかわりをもたざるをえないことを考えると、このようなシステムは、日本における芸大などの在りようより、はるかに合理的なものといえるだろう。

このソウル大学校音楽大学には、西洋音楽のピアノや声楽、弦楽器などの実技を主にした科が設置されているのは言うまでもない。げんに、現学長の金鳳楚教授などはチェリストとしても活躍しておられる。しかし、それと同時に、理論を扱うセクションとして国楽科が設置されている。国楽という言葉は韓国の伝統的な古典音楽を指すが、日本における、雅楽を含めた伝統邦楽という概念に、ほぼ相当する。しかし、ここでは単に国楽ばかりでなく西洋音楽の理論も扱い、また同時に、国楽の実際の演奏も教育している。このへんに、音楽的に広い視野から自国の伝統を見直そうとする教育思想や、演奏と理論との一体化を重視するという姿勢がうかがわれる。この点、多くの場合セクショナリズムに陥りがちな、日本の音楽教育機関と比較して、学ぶべき点が多い。

この国楽科長で韓国国楽教育研究会の会長も兼ねておられる張師助博士と、国楽科助教授の韓万榮先生のおふたりには前回の訪韓の時から面識があるが、今回もお会いして韓国音楽についてのいろいろなお話をうかがった上、いくつかの貴重な文献資料を寄贈していただいたり教

えていただいたりした。助張師博士には、後にその一部を紹介するが、国楽やその楽器に関する数多くの著作があり、また、学会などの招きでたびたび来日されている。一方、韓万榮先生は仏教音楽の研究の第一人者であるとともに、韓国各地で民俗音楽を現地調査され、またユネスコの委員として国際的にも活躍しておられる民族音楽学者である。以前に、韓先生の採集、採譜による民謡集が出版されており、今のところ、現地調査による民謡楽譜集としてはこれが唯一のものと思われるが、現在は絶版とのことで、入手できなかった。再版が待たれる。

3. 国立国楽院

ソウル大学校音楽大学をはじめとする、女子大や私大を含めた多くの音楽大学とは別に、国楽の公演、伝承、演奏家の養成などを目的とした唯一の公的機関として、国立国楽院がある。これは文教部（日本の文部省にあたる）の管轄のもとに、1951年に開設されたものであるが、1961年以来、文公部（Ministry of Public Information）に所属して現在に至っている。公演活動を活発におこなう一方、若い世代の国楽演奏家養成にも力を入れており、そのための教育機関として、中学校、高等学校に相当する6年課程の付属学校をもっている。ここでは国楽および西洋音楽の理論と実習のほか、カリキュラムに一般教養学科も組まれており、卒業者が、演奏家としてばかりでなく、一般社会人としての基礎も身につけられるように配慮されている。

わたしたちは院長の金瑛洙先生にお会いして、以上のようなお話をうかがった後、楽士長の金星振氏の案内で各クラス

のレッスン風景を見学した。伽倻琴、玄琴など個々の楽器のクラスでは、楽器を手にした数人から十数人の生徒が、先生の模範演奏にならって反復練習をしていた。このような、各楽器ごとに基礎技術を習得するためのクラスのほか、合奏といって管、弦、打の各種楽器による大編成のアンサンブルをおこなう、進んだクラスもある。たまたま合奏の練習にも立会うことができたわたしは、とくにそのなかで用いられる編鍾や編磬（中国伝来と思われる、大型の旋律打楽器）のダイナミックな音色に、すっかり魅せられてしまった。

日本でも、小野雅楽会をはじめ各地の雅楽会で楽士の養成に努めているが、韓国の国楽院では、より組織的で体系的な教育がおこなわれているという印象を受けた。

なお、韓国南東部の古都慶州にも、支部のような形で慶州国楽院がある。

4. コリアハウス

外人観光客向けに韓国の産業、社会、文化などのさまざまな側面を紹介することを目的とした公営機関が、コリアハウスである。伝統的な造りを模した建物のなかには、今日の韓国をフィルムによって紹介する映写室、古美術品や陶磁器、楽器などの陳列室、固有の伝統や文化に関する英文図書の販売コーナーなどが設けられ、韓国料理専門のレストランも付設されている。楽器の陳列棚のなかにも中国や西域とのつながりを示す豎型ハーブなどがあって興味をひいたが、ここでのわたしたちの最大の関心は、毎土、日曜日におこなわれる古典舞踊の実演にあ

った。

これは、ソウル市内のいくつかの公認舞踊研究所が、毎回持ち回りで出演しているもので、わたしたちが訪れた2月1日はユン・ヘ・ジョン舞踊研究所の担当であった。演目は、宮廷舞踊、剣の舞、扇の舞、太鼓の踊りなど、多彩なものであった。伴奏にテープ録音された音楽を使用していた点がいささか残念であったが、ステージと客席の区別のない板の間のホールで、5、6歳から10歳程度の少女を含む十数名の女性によって演じられた舞踊は、わたしたちを十分に堪能させてくれた。とくに、朝鮮民族に固有の群舞の流れの美しさに、わたしは圧倒された。

この日見物していたのは、アメリカ人やドイツ人を中心に50人ほどであった。奇妙なことに、韓国を訪れる外人のなかでもっとも数が多いはずの日本人は、わたしたちを除くとひとりも見かけなかった。またたとえば、韓国人の民族的感情を理解するために最低必要であろうと思われる「板門店」の見学でも、専用バスの同乗者は欧米人ばかりであり、ホテルなどにひしめいている日本人をそこに見つけることはできなかった。これらは、韓国における平均的日本人観光客の興味の対象と、欧米人のそれとの違いを示す、象徴的な現象のひとつである。しかし、ソウルでも済州島でもこのような日本人が多かったということが、かえって、わたしたちの意図を住民が好意をもって受け入れてくれる結果を生んだということも、事実である。

5. 古典舞踊研究所

わたしたちは、韓国舞踊における身体

の動きや伴奏音楽のリズムを少し詳しく調べることにし、コリアハウスの事務所の紹介で、郭楨蘭舞踊研究所の門をたたいた。来日したこともある郭楨蘭女史は、ここで毎日20人位の女子小学生に舞踊と太鼓の指導をおこなっておられるが、突然の来訪にもかかわらず、わたしたちを快く迎えてくださった。後で知ったことであるが、御主人の崔忠雄氏は、伽倻琴の演奏家として国楽院に勤めておられる。こちらも夫婦で音楽の仕事をしているという共通性もあって、4日間という短い期間ではあったが、毎日手とり足とり熱心な指導をいただいた。こうしてわたしたちは、韓国古典舞踊と太鼓のリズムの基本的パターンのいくつかを、身をもって習得することができたのである。はじめは少し高いように思われた1時間3,000ウォン(約2,000円)というレッスン料も、今考えるとむしろ安すぎるぐらいである。わたしたちはまた、今後の練習のため、ここで杖鼓(チャンゴとよばれる、もっとも一般的な太鼓)を購入した。

インドやアフガニスタンで、あるいは済州島の各地でも同じような体験をしたものであるが、このように“音楽”というものは、国境や言語の違いを越えてわたしたちを初対面の人たちにストレートに結びつけてくれる。これは、わたしたちの現地調査において、多くの面で強力な武器になっているといえるだろう。

6. 韓国民俗村

ソウルから南に、直線にして約30kmの地点にある水原という町の近郊に、国の費用によって昨年(1975年)完成した

ばかりの韓国民俗村がある。これは、現地で入手したパンフレットによると、次のように説明されている。

「1) わが国の伝統文化と民俗芸術を保存伝受し、2) 博物館的性格のもとに、民俗資料展示を兼ね、学生たちの現場学習場とも活用し、3) 外国観光客にわが民俗、文化、芸術を紹介し、わが国に対する認識を新たにする趣旨のもとに、4) 202,000坪の敷地に180余棟の建物を昔さながらの様式をもたせて建立したものであります」

これらの建物は、昔の富家、各地の農家、水車小屋、鍛冶屋、陶磁器や笠、竹細工の職人小屋など、全部で40余のブロックに分かれ、このほかに建築中のものも見られた。建物とそれに付随する民具類が単に建築、展示されているだけであれば、20万坪以上という広大な敷地と規模の大きさには脱帽するとしても、それほど驚くには当たらないかも知れない。しかし、ここでユニークなのは、実際の生活に近い形で村人が住んでいる、という点である。各地の「農家」では、それぞれの土地の民具を使い、それぞれの生活様式に従って農民が生活している。鍛冶屋の小屋にはちゃんと鍛冶の職人がいて、トンテンカンテンとカナシキをたたく音が響いている。別の家では昔風の冠やゴザなどを作っている。同様に、機織りや糸つむぎ、白ひきなどの様子を実際に見ることができるのである。

ただ残念なことに、1月、2月は観光的にはオフ・シーズンであり、また、マイナス20度にもなるソウル近郊の厳しい寒さのなかで、南部の建築様式そのままの農家などに住むことはできないので、今回わたしたちが訪れた時には、鍛冶屋

などのほかには「村人」は見かけなかった。春から秋のシーズン中に、是非もう一度訪れたいものである。

1月末の凍てつくような寒風にさらされながら、わたしたちが民俗村のなかを歩いていると、どこからか勇ましいカネと太鼓の音が近づいて来る。見ると、農楽（韓国の代表的な民俗芸能のひとつ）の団である。早速、常に持ち歩いているステレオ録音機のスイッチを入れ、カメラを構える。後で分かったことだが、民俗村専属の農楽隊が、毎日2回ずつ村の中央の広場で公演をするのである。この寒いのになわたしたち以外にも物好きがいるとみえて、アメリカ人など4、5人が集まって見物するなかで、農楽隊は約30分間の公演をおこない、続いて男寺党（ドサ回りの芸人）が皿回しや綱渡りなどを披露して、この日は幕となった。

このように、人々の生活や伝承文化、芸能などを何らかの「生きた」形で保存するというのは、非常に興味のある試みである。伝承者を集めなければならない、などの問題があるにしても、日本でも、とくに民俗技術や民俗芸術に関してこのような民俗村、あるいは広域的な「民族村」といったものの建設を考えることはできないだろうか。

こんな思いにかられながら、わたしたちは韓国民俗村をあとにした。

7. 文献資料収集

実は、ソウル滞在は1月19日～25日、2月1日～4日の計11日間であり、その中の何日かは政府や日本大使館との折衝、ビザ延長手続きなどに費された。その残りのきわめて限られた時間におこな

った、音楽を中心とする調査活動のなかから、特に印象に残ったいくつかのイベントを、以上に抜き書きしてきたのであるが、ここで、その間に得られた成果のひとつとして、音楽関係の文献資料をまとめてみる。

つぎに列記するのは、わたし自身の整理の意味で過去に入手したものも含めてあるが、韓国の音楽のみに関する単行本および資料集で、現在わたしの手元にあるものである。文学的、あるいは民俗学的資料としての民謡集などは除外しており、また、音楽に関するものでも論文の抜刷などは割愛してある。順不同に、書名、著（編）者名、発行年の順に列記する。

①『楽学軌範・楽章歌詞・教坊歌謡』三冊合本（成宗康靖王他，1975）、②『音楽学論叢』（論文集，1969）、③『韓国楽器大観』（張師助，1969）、④『国楽論攷』（張師助，1971）、⑤*Glossary of Korean Music*（Chan Sa-Hun，1972第2版）、⑥『国楽器演奏法』（張師助，1972第4版）、⑦『韓国音楽史』（張師助，1972）、⑧『韓国伝統音楽斗研究』（張師助，1975）、⑨『国楽概論』（張師助・韓万榮，1975）、⑩*Survey of Korean Arts: Traditional Music*（National Academy of Arts，1973）、⑪『伽倻琴散調』（李在淑，1971）、⑫『旋律線時調譜』（鄭垌兌，1970）、⑬『韓国民謡曲集』（1964）、⑭*Korean Folk Songs*（1970）、⑮『韓国歌謡』（1975）以上。

①の合本は、古書の1,000部限定影印版である。このうちの『楽学軌範』は、李朝時代の第9代成宗康靖王（在位1470—1494）が編さんさせたものであり、韓国音楽最高の古典とされている。この限定

版を、たまたまソウル市内の古本屋で見つけることができたのは、幸運であった。②は、前のソウル大学校音楽学部長をされていた李恵求博士の頌寿記念論文集である。その幅広い活動を物語るように、日本の斯学からも林謙三先生と岸辺成雄博士が、それぞれ稿を寄せておられる。③から⑧までは、前出の張師助博士による研究書および概説書であるが、このなかで③と④は日本の関係者のあいだでもよく知られている大著である。⑨は同じく前出の韓万栄先生との共著になる概説書。⑩は外人向けの概説書。⑪から⑮までは楽譜資料集であるが、そのうち⑮は、ソウル大音楽大学で伽倻琴の先生をしておられる李在淑女史の採譜によるものであり、実際の演奏に裏付けられている点で、資料としての信頼度が高い。以上の15点はすべてソウルで発行されており、言語は韓国語ないし英語である。

なお、このほかに国楽院の金琪洙院長から寄贈を受けた3枚組のレコード集『韓国国楽選』を、資料として付記しておく。

8. 濟州島にて

ビザ延長の手続きのために2度にわたるソウル滞在を要し、濟州島とソウルのあいだを2回往復する羽目になったが、その合間の1月9日～18日、1月27日～30日に、濟州島現地で情報の収集と調査の準備にあたった。

まず、前回と同様に、濟州大学の国文学部長の金栄敦教授と、国文科で民俗学を担当しておられる玄容駿教授にお会いし、各村落の状況や民俗行事などについて教えていただいた。金栄敦先生は、長年にわたって濟州島各地の民謡の採集に

従事され、歌詞の資料集を出された〔金栄敦、1965〕。濟州島民謡に関する資料集としては、ほかに濟州民俗博物館長の秦聖麒氏によるもの〔秦聖麒、1958〕や、洪貞杓氏による概説書〔洪貞杓、1963〕などがあり、また、任東権氏による韓国民謡集〔任東権、1974〕にもその一部が掲載されているが、資料の膨大さという点、および体系的な分類に従って配列されているという点で、金栄敦先生のものが抜きん出ている。これはわが民族学博物館に1冊御寄贈いただいた。同先生にはまた、何人かのインフォーマントを紹介していただいた。

これらのお礼にという大変おこがましいが、わたしは後日、調査の合間に、金栄敦先生からの依頼によって、国文科の学生を対象に「世界民謡と濟州民謡」という題で講演をおこなった。

つぎに、濟州民俗博物館は、館長の秦聖麒氏の個人的努力によって建てられたものであり、小じんまりとした建物のなかに、民具を中心とした民俗資料が数十点陳列されている。秦聖麒氏は在野の民俗学者で、上にあげた民謡資料集の他、濟州島の神話、伝説、巫歌、巫俗、タブーなどに関する数多くの資料集を刊行されている。わたしたちは民謡資料集の寄贈を受け、その他の数冊を購入した。

なお、濟州島民謡に関する音楽的研究としては、ソウルの延世大学の羅運栄教授による論文〔羅運栄、1971：pp. 103-134〕がある。

わたしたちはまた、KBS（韓国放送公社）の濟州放送局にも足を運んだ。フィールドワークの際に、まず現地の放送局にあたってみるというやり方は、音楽の場合、常道のひとつである。とくに濟州

島では、毎年秋に全島的な文化祭が催されて民謡大会がおこなわれ、その主催者のひとつが放送局であるところから、担当者に話をうかがうことにしたのである。放送部長の金根鎬氏は、放送局所蔵の録音テープを聞かせてくれるなどの便宜を計ってくださったが、とくにありがたいことに、昨年（1975年）の民謡大会出演者リストを入手することができた。このなかには、少数の山間部落にしかみられない仕事唄などの演唱者が含まれていた。リスト自体は、唄の名前と演唱者の出身地を刷ただけのごく簡単なものであったが、今回のような短期間の集中調査にあっては、いかにして短時間のうちに目指す唄のインフォーマントを探し出すかということが重要なポイントになるため、これは大変役に立った。

その後、2月6日からの3週間余、済州島各地の村落をつぎからつぎへと飛び回って、各種の民俗音楽の録音と聞き取りを中心とした調査をおこなった。この間、ある時は、ようやく尋ね当てたインフォーマントがカゼをひいて声が出なかったり、病気で入院してしまった後であるなどの不運にも見舞われた。もっとも残念だったのは、その人しかいないと言われた古い唄の伝承者が、つい昨今亡くなったとわかった時である。

しかしながら全体としては、計20箇所

で延べ約100人を対象に、前回の調査を大幅に上回る42種目の民謡を収録することができ、また、それほど数は多くないが、巫俗や子供のわらべ唄も調査することができた。これらの個々の資料を含めた具体的な調査報告は、いずれ稿をあらためておこないたいと考えている。

最後に、今回いろいろな形でお世話になった、ソウル大学校音楽大学の金鳳楚学長、張師助教授、韓万栄助教授、国立国楽院の金琪洙院長、金星振楽士長、舞踊研究所の郭楨蘭女史、済州大学の金榮敦教授、玄容駿教授、済州民俗博物館の秦聖麒館長、KBS 済州放送局の金根鎬放送部長、済州島で運転手兼通訳としてわたしたちを助けてくれた姜昌玉氏、および調査に協力していただいた多数の済州島民の方々に対して、厚く御礼申し上げます。

文 献

- 秦 聖 麒, 1958, 『南国斗民謡』済州民俗文化研究所。
 洪 貞 杓, 1963, 『済州島民謡解説』省文社。
 任 東 権, 1974, 『韓国民謡集』集文堂。
 金 榮 敦, 1965, 『済州島民謡研究(上)』一潮社。
 羅 運 栄, 1971, 「済州島民謡斗作曲学的研究(I)」『延世論叢』9集 延世大学校大学院。
 櫻井哲男, 1975, 「済州島の民俗音楽」『音楽学』21巻2号 音楽之友社。